



2005年(平成17年)
9月号(No. 724)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

100周年を迎えた日本山岳会②	
マナスル登頂と登山ブーム…1	
100周年記念シンポジウム	
「山での救急蘇生を考える」…4	
中央分水嶺踏査	
宮城/富山/宮崎…6	
100周年ニュース…8	
Climbing & Medicine 48…9	
崑崙山脈未踏峰(6345m)登頂…10	
100周年記念事業 会員並びに	
有志募金の御礼とご報告(5)…11	
支部だより	
山形/信濃/山梨/京都…12	
報告	
科学委員会/事業委員会…14	
図書紹介…16	
会務報告…18	
ルーム日誌…20	
会員異動…20	
新入会員…21	
図書受入報告…21	
INFORMATION…22	
さんけん通信…23	

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時

100周年を迎えた日本山岳会② マナスル登頂と登山ブーム

松田雄一

日本山岳会100年の歴史において、8000^{メートル}峰の一座、マナスルに初登頂できたことは、特筆に値することであろう。そのマナスル登頂とその後続く登山ブームを、隊員のひとりである松田雄一氏に綴ってもらった。

日本山岳会は、今年10月、創立100周年を迎えるが、1956年のマナスル登頂は、ちょうどその中間点にあたる。

戦後10年を経過したこの時期は、わが国の歴史上からみても、ヒマラヤの登山史からみても、注目すべき年と言える。

一方、14座ある8000^{メートル}峰が、

1950年にフランス隊によって、アンナプルナ峰が登られてから、1964年に最後まで残されたシシャパンマ峰が登頂されるまでの15年間は「ヒマラヤの黄金時代」とも言われている。

本稿では、時代背景を踏まえて、この時代の日本の登山界を回顧し、マナスル登山の果たした意味につ

戦後のヒマラヤ登山の夜明けと許可交渉

いて考えてみたい。

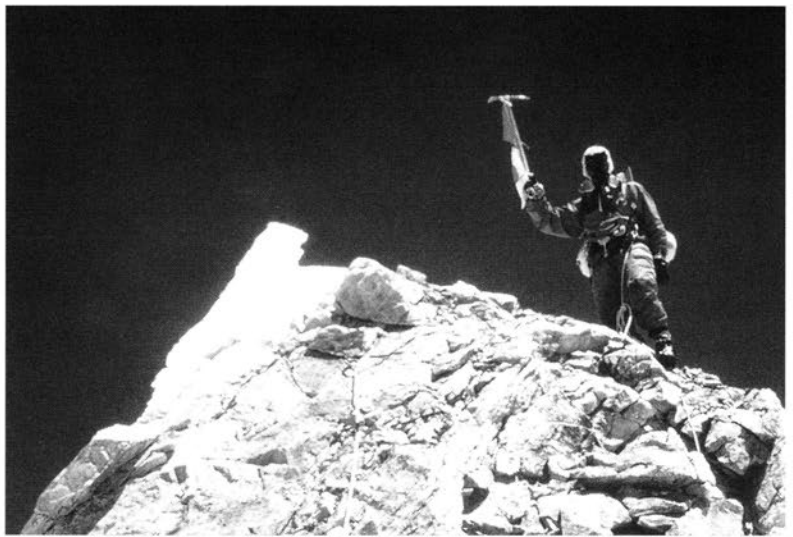
大ヒマラヤ山脈に連なる国々も、1945年に大戦が終結し、1947年にこの地域を支配していた英国から、インドが独立したので、ヒマラヤの王国ネパールも、世界各国から注目を浴び、開国を迫られた。1950年、フランスの登山隊によって、アンナプルナに人類初の8000^{メートル}峰登頂が成された後は、欧米諸国から相次いで登山許可の申請がなされていた。

1951年9月、日本はサンフランシスコにおいて、世界48カ国との間で講和条約に調印し、海外登山に出られる日も近くなった。

AACK(京都大学学士山岳会)

のメンバーは、学術会議などで海外に出る機会も多く、ヒマラヤの解禁に近いことを肌で感じていた。1952年1月にカルカッタで開催されるインド学術会議に招請されて、いる木原均博士に随行して、ネパール・ヒマラヤのマナスルの登山許可を入手すべく、西堀栄三郎氏を派遣することにした。

このインド、ネパールへの西堀ミッションが登山許可入手するまでの一部始終については、『山岳』第91年(一九九六)に、「マナスルへのプロローグ」として詳述されているので省略するが、占領下の日本から国交のないネパールに入国することが、いかに大変であったかについては、西堀氏本人が、『芸報』二二九号(1965年5月号)に「マナスル以前」と題して



1956年5月9日、マナスル頂上に立つ今西寿雄隊員

載せている。

マナスル初登頂までの五年間

1952年4月には、サンフランシスコ講和条約が批准され、日本も独立国家となった。そしてこの年、西堀氏が京都大学の名で申請してきた、マナスルの登山許可がネパールから届いた。この登山許可は、AACKの好意で日本山

岳会に委譲された。本会では機を逸することなくマナスルのルート偵察と1953年の登山隊準備のため、今西錦司隊長以下6名の踏査隊を空路ネパールへ派遣した。

1953年の第一次登山隊は、踏査隊の現地からの報告をもとに、短時間のうちに準備できたが、高所用食料などについては、必ずしも十分なものとはいえなかった。それでも第一次登山隊は、7750^{メートル}まで達するこ

とができた。1954年の第二次登山隊の準備は、第一次隊の経験を生かし、高所用の装備は、全面的に改良された。

時、あたかも戦後の経済復興の流れの中、朝鮮動乱によりもたらされた特需景気により、日本の経済は、にわかに活気づいていた。1954年の秋頃からは、輸出の

増大により、好景気は、関連産業にも波及し、日本の景気も「神武景気」で活気があったからであるう。

しかし、第二次マナスル登山隊は、予期せざるサマ村民からの登山阻止に遭い、ガネッシュ・ヒマールへ転進せざるを得なかった。

第三次登山隊マナスル登頂に成功

1956年の第三次マナスル登山隊は、最後の切り札として横有恒元会長を隊長に指名し、背水の陣で臨んだ。これに先だち、サマ問題の実情調査と登山許可取得のため、西堀栄三郎、成瀬岩雄両名をカトマンズに派遣し、更に念のため、55年秋に、小原勝郎隊長以下3名を第三次隊の先遣隊として、サマ村との友好親善を図るために現地に派遣した。

第三次登山隊、横隊長以下12名は、マナスルの山麓まで順調にキヤラバンを進めたが、ここで再びサマ村民の登山阻止に遭遇した。しかし今回は横隊長の誠意ある交渉の結果、4000ルピー(当時の金額で約20万円)の僧院修復費用の寄進で解決することができた。この隊は25歳から62歳までの年

齢構成であったが、すべての隊員を平等に扱う横隊長のリーダーシップのもと、ガルツェンを隊員に加えたチームワークは素晴らしかった。横隊長は、とくにルートやキャンプ地の選定には慎重であった。プラトールや北峰からの雪崩、アイスフォールの通過には、万全を期し、高所へキャンプを進める前に、横隊長の指示で、展望のきくナイケ山の中腹まで登り、終日雪崩の観察をさせられたことなど、今でもよく覚えていいる。

幸い、登頂時期の好天の予測も的中し、5月9日、今西寿雄、ガルツェン・ノルブの2名が第一次登頂に成功。引き続き11日、加藤喜一郎、日下実も第二次登頂に成功した。詳しい行動については横有恒著『マナスル登頂記』(毎日新聞社刊)にゆずることにするが、依田孝喜撮影によるドキュメンタリー記録映画『マナスルに立つ』(映配:毎日映画社制作、文部省特選)は、映像としても記録(とくに8000^{メートル}山頂での動画は世界で初めて)としても申し分なかった。そのため、ドキュメンタリー映画部門のロードショーで新記録を樹立し、多くの人の共感をよび、

わが国に登山ブームをもたらす要因にもなった。

海外登山ブームの夜明け

このマナスル初登頂の影響で、ヒマラヤは、多くの人に関心をもたれるようになったが、一般の登山者には高嶺の花であった。

その頃、海外登山や旅行には外貨の厳しい制限枠があり、大蔵省をはじめとする五つの省庁で構成されている海外渡航審議会という関門があり、スポーツ外貨、学術調査、国際親善などの外貨枠の予算内での、申請でないとい認められなかった。この審議会を外貨裏付のある円の許可がないと外国への航空券や外国航路の船に乗ることもできなかったからである。

そのため、ヒマラヤに行けない社会人山岳会や大学山岳部の若者たちは、何時の日かヒマラヤに行ける日を夢みて、国内の山で、海外の山を想定した登山で精進するしかなかった。

マナスルに続く日本山岳会としての本格的な登山隊は、1959年にヒマルチュリを試登した登山隊があったが、他には1958年のチョゴリザ登山隊が目立った。

けであった。しかし、いくつかの大学が計画したヒマラヤ地域の学術調査隊は、外貨の獲得が得やすく、何隊かがヒマラヤで成果を上げることができた。

大衆化された日本の登山界も新しい時代へ

目を国内に転ずると、山へ出かける若者たちが急増した。

1956年、政府が公表した『経済白書』には「もはや戦後ではない」と明記されたことにより、「日本は敗戦国」という意識は払拭された。若者の生活にも余裕がみられ、山には多くの登山者が訪ずれるようになった。当然のことながら、本会への入会者も急増することになった。

マナスル登山にあたり、毎日新聞社では、同社内に設けられた「ヒマラヤ登山後援会」を通じ、全国津々浦々の小学校、中学校の児童に募金を呼びかけ、多くの支援を受けていたので、「文部省特選」を受けた、長編記録映画『マナスルに立つ』は、全国の小、中学校を巡回して上映された。今でもその時の感動を覚えているという話をよく耳にする。

1957年、井上靖の『氷壁』がベストセラーとなり、ガストン・レビュファの『星と嵐』も人気を集めた。職域の山岳部も増え、外貨の事情で、海外登山に行けない社会人山岳会による困難な壁の登攀での活躍が目立った。

1958年は日本の登山界にとつて、記念すべき年になった。前年の『氷壁』ブームに続き、山と溪谷社からは、先鋭的アルピニズムをリードする季刊誌として『岩と雪』の創刊号が、「1956—8年積雪期登攀記録」の特集記事を付して刊行された。これとは別に串田孫一氏による月刊誌『アルプ』の創刊号が創文社より刊行され、登山ブームに拍車をかけた。本会の『山日記』も、この登山ブームの底辺の拡大に貢献していることは間違いない。

更に特筆すべきことは、この登山ブームの先端で、新しいアルピニズムの方法として、積雪期のDV (Difficult Variation) の面で意欲的な活動をしている社会人登山家を中心として、RCCⅡ (第二次RCC) が結成されたことである。

この年の6月には金融が緩和さ



ネパールのマヘンドラ国王からコロネーション・メダルを授与された全隊員

れ、再び高度成長(岩戸景気)が始まり消費も拡大され、レジャーブームが始まった。1960年には安保闘争があったが、国内の難ルートの記録も増え続け、登山はますます盛んになった。

1964年4月には東京オリンピック開催に先立ち、海外渡航が自由化されたので、ヨーロッパ・アルプスの登攀などが盛んになった。マナスルの登頂で、大衆化された日本の登山界も新しい時代を迎えることになったのである。

100周年記念シンポジウム 「山での救急蘇生を考える」

医療委員会 野口いづみ

7月4日、東京都体育館において、100周年記念シンポジウム「山での救急蘇生を考える——いざという時、どうしたらよいのか」が開催された。

最初に野口が「山での病気と対処」について講演した。現在、山での遭難事故の中で死亡・行方不明者の93%が高年である。遭難の原因として病気は第2位を占めており、中高年者は山での病気に注意する必要がある。登山中は、血圧が上昇し、脈拍が速くなり、安全限界までの余裕が少なくなり、心臓や脳の病気が起こりやすくなる。虚血性心疾患と脳卒中のリスクファクターは、高血圧症、高脂血症、糖尿病、肥満などの生活習慣病である。喫煙はこれらの病気の原因になるとともに、急性症状として、血圧上昇、血液粘度の増加、酸素運搬量の低下などをもたらす。登山に有害である。虚血性心疾患である狭心症と心

筋梗塞は、冠動脈の狭窄、閉塞、痙攣によって、心筋に酸素不足が生じた状態である。狭心症による胸痛は多くの場合、容易におさまるが、不安定狭心症や心筋梗塞は重篤であり、迅速な搬送が必要になる場合が多い。山でできる処置として、狭心症では冠動脈拡張作用のあるニトログリセリンを、3～5分間隔で3錠服用(3噴霧)する。アスピリンは血液をさらさらにする作用があり、心筋梗塞ではアスピリン $\frac{1}{2}$ ～1錠を噛み砕くことで症状が改善される場合がある。脳卒中には、脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血があるが、症状だけでは専門家でも診断するのが難しい場合が多く、迅速に医療機関へ搬送することが必要である。一過性脳虚血発作は本格的な脳卒中の前触れと考えられる。酒、食事、入浴は血圧を低下させる3拍子なので、飲酒・摂食後の入浴は避ける。



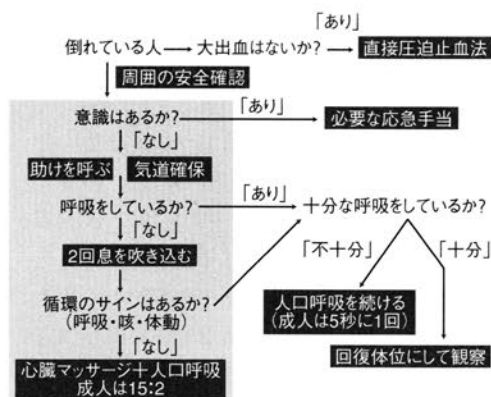
シンポジウムで、左から司会の増山、恵、志賀、野口

山での病気を防ぐためには、メデイカルチェックを受けて、生活習慣病をコントロールし、体調を整える心がけが必要である。山での病気は9割以上、日ごろの生活レベルの努力によって避けることができる。登山に際しては、前日から過労と睡眠不足を避け、当日は体調を把握し、飲酒・喫煙をしないようにする。マイペースを守るために心拍計も有用であり、目標心拍数を $(220 - \text{年齢}) \times 0.75 \sim 0.85$ とする。また、脱水状態になると血液が固まりやすくなる。脱水は体重2%までは問題が少ないので、水分不足量を体重の2%以下にするようにする。

次に志賀尚子氏が、「山での救急

蘇生法」について講演した。一般的な心肺蘇生法については広く普及が図られているので、ぜひ、講習を受けてほしい。最近、一般人にも自動体外式除細動器(AED)の使用が認められるようになり、AEDも含めた講習が実施されている。AEDは現在、490ヶ所の機種が厚生労働省に認可申請中であり、認可されれば山での使用も現実的になるだろう。

山で救急蘇生法を行なうに当たってはまず、周囲の状況をよく確認して、救助者自身の安全を確保する。心肺蘇生法の基本的な流れは、①意識の確認、②気道確保、③人工呼吸、④心臓マッサージである(5ページの図参照)。呼吸をしているかどうかは、胸が動いているか「見て」、呼吸音が聞こえるかどうか「聞いて」、呼吸を頬で「感じて」、判断する。心停止は、呼吸を2回吹き込んだ後、呼吸、咳、体動があるかどうかで判断する。以前は頸動脈の拍動を触れるように指示されていたが、難しいので省いてよい。心臓マッサージは両乳首を結ぶラインの真ん中を上から垂直に圧迫する。胸骨が35～5センチ沈み強さで、1分間100回の速



さで行なう。人工呼吸2回+胸部圧迫15回を、4サイクル行なって、再度、循環のサインを確かめる。出血していれば止血をする。約5分間、指か手でしっかり止血してから包帯や三角巾で圧迫する。全血液量の20〜30%以上出血するとショック状態になる。体位は基本的に仰向けとし、呼吸が楽にできるようにする。意識がない場合は、うつぶせに近い側臥位にする。出血が多く顔面蒼白な場合は足を挙上させる。呼吸困難な場合は上体を起こす。気道が確保されているか、楽に呼吸ができるか、常に確かめる。体位を変えるときには頸椎の保護を念頭におく。飲

食は原則的に禁止する。

また、低体温症、外傷、雪崩事故、被雷事故の要点は次のようである。低体温症では呼吸や脈拍を確認しにくいので、呼吸や脈拍は長めに、30〜45秒間観察し、蘇生が必要かどうか判断する。心室細動を起こしやすいので、手荒く動かせないようにする。外傷では呼吸循環のサインがなく、外傷の程度が重症な場合は蘇生を試みる必要はない。多数の負傷者がいる場合は、呼吸循環のサインがない者は優先順位が低い。雪崩では、通常、窒息か鈍的外傷が死因になる。呼吸循環のサインがない場合には、深部体温が32度以上か、埋没時間が30分未満なら蘇生を20分行なう。深部体温32度未満、埋没時間30分以上なら顔面の周囲に空間が残っていた場合のみ蘇生を行なう。被雷事故では主な死因は心室細動や心静止などの心停止である(『山』8月号医療コラム参照)。

最後に、恵秀彦氏が「山での救助法」について講演を行なった。緊急度が高く蘇生を必要とするものとしては、転滑落による外傷、生活習慣病の悪化、熱中症、低体温症、雷事故、ハチ刺傷によるシ

ョックなどがある。山中は街と異なり、救命に不利な場合が多い。蘇生法や傷病者の搬出法などの技術を身につける必要がある。

「蘇生の連鎖」は、山では「携帯電話や無線などによる早期通報↓登山者による早期の蘇生とAED↓円滑な救急医療サービス機関への引継ぎ」になる。AEDについては学童と救急救命士の使用試験で効果に大差がなく、使用は容易である。海外では山中のAEDによる救命例が増加しており、今後、小屋やレスキューチームなどへ設置されることが望まれる。

仲間が稜線から滑落した場合は、まず、パーティーの安全を確保する。自力救助か救助要請かについて、メンバーの力量・疲労度や、日没までの時間・天候・地理的条件などを総合的に判断して決定す



活発な質疑応答

る。ヘリから救助される場合には、昼間ならカメラのストロボ、手鏡、救急シート、ホイッスルが、夜間ならヘッドランプ、焚き火が発見してもらいやすい。救護にあたつては、現場の安全確認と感染予防が大切である。プラスチックの手袋を装着し、目・顔・口などを保護することが望ましい。人工呼吸を行なう場合はポケットマスクやフェイスシールドを利用する。

転・滑落者へは、頸椎保護の立場からも傷病者の目線で近づく。搬送には、ザックなどを利用する。受傷後1時間以内の手術で救命される例が多いので、救命に関係のない手当ては省略し、1時間以内に医療機関へ移送することが必要である。

講演後の質疑応答では、聴衆から活発な質問がなされた。講演後のアンケートは好評であり、実技を希望する声もあった。

なお、本シンポジウムは「山の救急医療ハンドブック」(山と溪谷社) 発刊記念講演をかねて行なった。本は「コンパクトで充実している」と好評であった。100周年記念式典出席者には配布される予定である。



分水嶺上最高峰の乗鞍岳頂上で(右端が木戸支部長)

飛騨高山スキー場から西方向に踏査。牛首山を過ぎ標高が下がるにつれ藪との闊いとなるが、10時間弱の行動で前回終了点に到達し、冬季区間を無事終えた。

夏季区間は9月に計画、乗鞍岳肩の小屋に10名で入山したが、翌日は強風と雨混じりのガスで剣ヶ峰の1等三角点を確認したのみで敗退。1週間後に4人で再挑戦、石の地藏さんを拝みながらハイマツの千石尾根登山道を下っていく。地図にない奥千町避難小屋は真新しいログハウス。ここから千町ヶ原にかけ池塘のある湿原地帯。この日も10時間行動だったが、丸黒山とゴールの日影峠には差し入れをもったサポート会員が待機していた。

最後に残ったのは乗鞍岳～野麦峠の区間。05年3月23日早朝、長野県奈川村(現松本市)観光課のアドバイスのおかげで、除雪された道路を野麦峠1672mまで一気に入る。1等水準点を確認し笹藪の中へ。登るにつれ雪がまだ深く、三角点は発見不能。2163mでのテント泊、翌日は高天原経由でゴールの乗鞍岳剣ヶ峰をめざす。氷に包まれた乗鞍本宮の前で踏査完了の握手、中央分水嶺の最高地点である。

03年11月の調査開始から1年6ヶ月、偵察・事前調査も含め12回(延べ20日間)、延べ51名の支部会員の参加により全行程を完全踏査することができた。全コースを歩き通した木戸支部長の提案で5月中旬、亀谷温泉にて反省会を開催した。(山田信明)

宮崎支部

今、分水嶺は最南端の佐多岬へ

日本最北端の宗谷岬を発した日本列島中央分水嶺は、山野・岩峰・田園を駆け巡り、ここ佐多岬に達する。2004年12月11日午後2時25分、今まさに我々宮崎支

部員6名は、分水嶺最南端の岬へとその足跡を刻もうとしていた。

宮崎支部分水嶺踏査班は、12月10日、4月の例会登山で計画した分水嶺踏査区間(荒西山～六郎館岳)を事前踏査し、翌11日、佐多町の田尻集落に近い佐多ビーチホテルで太平洋の朝日を拝し、内山会員と合流後佐多岬へと向かった。田尻集落のはずれから小ピークを目指し、獣道もない分水嶺をタラノキやサルトリイバラに行く手を阻まれながら、三角点や独立標高点を辿り、太平洋戦争時の砲台跡らしきピークを最後に、展望台に到着したのは3時間後であった。ここで南日本新聞の山口支局長と合流し、もうこれ以上は進めない岬突端までの最終区間をそれぞれの思いで歩き、踏査を完了した。

岬では、02年9月から土日の休みを利用して、錦江湾分水嶺単独完全踏査に挑戦し、47日目の今日、その目的を達成した内山会員の快挙に祝杯を挙げるとともに(ちなみに氏の51歳の誕生日でもあった)、日本列島中央分水嶺の佐多岬到達という二重の喜びを味わった。このあと、海岸沿いの岩場を伝うことで岬突端の崖下まで到達し、太平洋の荒波の洗礼を受け余韻を楽しんだ。

佐多岬の観光客は、展望台で太平洋を眺めて帰るのが一般的であり、今回のように太平洋の飛沫を浴びるほどの経験はしたことがなかった。岬までは有料道路のみで歩道は設置されていないため、帰路は「シェルパ斉藤氏(『BE-PAL』誌にて活躍中のバックパッカー)お勧めの「本土最南端トレイル」を経由して田尻集落に帰着した。

宮崎支部の踏査完了には、鹿児島県内の分水嶺を一手に引き受けて踏査した内山会員の努力に負うものが大であった。紙面を借りて感謝の意を表する次第である。(児島実照)



中央分水嶺最南端の佐多岬で



中央分水嶺踏査



踏査率：72.9% (2005.8.31現在)
延べ638日、3141人参加

宮城支部

たが 笹の締まった分水嶺

宮城支部では、共通区間に割り当てられていた山形支部との協議の結果、関山峠から北を担当することになった。区間内の全体を確認した結果、登山道は全体の約30%程度であることが判明。多くの会員参加を理想とするものの、藪ごぎに慣れていない会員が大多数という現実がある。このため、道のない区間は、残雪期に踏査することとなり、平成16年の春から行動に移すことになった。

16年の支部総会に先がけて最初の区間、鬼首峠から花立峠間が実行に移され、多くの支部会員に迎えられ感激した。夏場は道のある区間を踏査し、多くの会員がこれを消化した。特に苦労したのは、今年3月に実施した花山峠～須金岳の区間だった。行動中荒天に変わり、硬くなった雪の痩せ尾根とエスケープルートの柔らかくて深いラッセルで、里に下りたのが23時を回り、出迎えのサポートを心配させてしまった。

若手・年配者・女性などの協力により、5月14日に宮城支部担当区間のすべて115.3kmを踏査完了した。実際に歩いてみると、県境と分水嶺が離れていたり、地形が複雑で分水嶺の尾根が不明な所があった。また、

熊の足跡とほぼ同じルートで行動したり、思わぬ樹木に出会ったり、時期によっては、山菜サラダを食べながら行動したり、遠いと思っていた隣県の町をすぐ近くに見おろすことができ、驚かされたこともあった。

送りサポート・迎えサポートについて実費を支部会計で負担してもらったのも初めてのことであった。何よりも大きかったのは、17日間の山行で、延べ93人の参加を得たことで、支部の笹が締め、行動意欲が高まったことではないかと考えている。本部の企画ではあったが、支部としてこれを確認し行動目標のひとつとして、若手から年配者まで、思いもかけないチーム編成で行動できた。ほんとうに楽しい山行の機会を与えられたことに感謝している。(高橋二義)

富山支部

神通川と木曽川の分水嶺を歩く

富山支部は中央分水嶺から離れているため、岐阜支部と協力して岐阜県内の宮峠～乗鞍岳～野麦峠の区間を分担することになった。全長約50km。富山と名古屋を結ぶ国道41号線を高山から南に走ると宮峠776.6m。ここを西の起点として乗鞍岳3025.6mに至る稜線の日本海側の水系は、宮川から神通川に合流して富山湾へと注ぐ。登山道があるのは日影峠から乗鞍岳山頂の間だけで、道のない区間は残雪期に踏査計画をたてた。

04年3月、宮峠～日影平山間から踏査をスタート。国道361号線(美女峠)をはじめ、稜線を横断する林道などサポート要員が利用できる道路が何本もあって助かる。前日に宮峠近くの民宿に入り、早朝から美女峠を起点にカンジキや長靴スタイルでの踏査。杉林の中ではGPSがうまく使えず苦労する。4月上旬には、



船形山の頂上から中央遠くに見える荒神山への分水嶺を歩く

100周年ニュース

日本山岳会創立100周年

記念式典・祝賀晩餐会のお知らせ

平成17年10月15日(土)

新高輪プリンスホテル「飛天」「飛鳥」ほか

[記念式典]	国内外の山岳関係者を多数お迎えし、厳粛かつ100年の歴史と伝統にふさわしいセレモニーを行います。	開式 午後3時30分 受付 午後2時45分～ 会場 「飛天」 会費 無料
[祝賀晩餐会]	日本山岳会の創立100周年を祝う晩餐会です。1000人規模の壮麗な大宴会場で、この慶事を迎えます。	開宴 午後6時00分 受付 午後2時45分～ 会場 「飛天」 会費 1人15,000円
[講演会]	日本を代表するアルパインクライマー 山野井泰史氏と、もう1名の方に講演をお願いしています。	開演 午後1時～午後3時 受付 午後12時30分～ 会場 「飛鳥」 会費 無料(非会員の入場可)
[展 示]	日本山岳会100年の歩みを写真パネルで展示します。珍しい写真や懐かしい写真が数多く展示されます。	時間 午後12時～午後9時(予定) 会場 「うずしお」 会費 無料
[サロン/交歓会]	記念式典と祝賀晩餐会の間、祝賀晩餐会終了後にご利用いただけるようサロンを設けます。懐かしい会員や親しい仲間との懇親をお楽しみください。	開場 午後4時30分～午後6時 午後8時～午後9時 会場 「さくら」 会費 無料(ドリンクは有料)

《タイムスケジュール》

	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9時
飛 天					式典		祝賀晩餐会			
飛 鳥		講演会								
さくら						サロン			交歓会	
					受付					
うずしお	展示	目を見る100年の歩み								

Climbing & Medicine · 48

アナフィラキシーとエピペン

野口いづみ

山でハチに刺されて死亡したというニュースを時折、耳にします。犠牲者で多いのは山林の作業場で、不運な登山者や遠足の小学生も含まれています。これは、アナフィラキシーショックというアレルギー反応によるものです。刺されて1度目はショックを起こさずに、体内に抗体ができます。抗体ができてから刺されると、重症なアレルギー反応であるアナフィラキシーショックを起こします。

アナフィラキシーショックは稀ですが、生命のリスクの高いものです。血圧は低下し、脈は弱くなり、ショック状態になり、気道は浮腫を生じて呼吸が困難になります。動物や植物のたんぱく質を中心として、食物や薬など様々なものが原因になります。食べ物では蕎麦やピーナツによるものが有名です。私は薬によるアナフィラキシーショックの3例に遭遇した経験があります。幸い、3例とも数時間以内に回復しました。

アナフィラキシーショックにはエピネフリン

が奏効します。エピネフリンは、血圧を上げ、心拍数を増加させ、気管支を拡張させる作用があり、アナフィラキシーショックで起こる症状を改善させます。

最近、「エピペン」という、エピネフリンキットが入手できるようになりました。「エピペン」は、ペン型の容器にエピネフリン2mlが充填されているものです。安全キャップをはずして先端を太ももに押し付けると、針が押し出されて、エピネフリン0.3mg (小児では0.15mg) が筋肉内に注射できるという仕組みです(写真)。

「エピペン」は一般の人にも容易に使うことができ、医師に相談すると自費で入手できます。欠点として、使用期限が12~16カ月と短い点、1万5000~2万円程度と高額な点があります。しかし、山中で他に手立てがない時には他に変わりたいアイテムであり、特に、ハチに刺されたことがある登山者には必携と考えます。



エピペンを刺しているところ



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千代区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



崑崙山脈未踏峰(6345^{メートル})登頂

伊藤寿男

8月1日、平均年齢61歳の熟年登山隊が、崑崙山脈の未踏峰(6345^{メートル})に登頂した。登山期間は、2005年7月14日～8月10日。隊の構成は、伊藤寿男(66歳)隊長、前田栄三(61歳)副隊長、泉谷洋行(61歳)・栗本俊和(56歳)隊員から成る。

対象の山

の地域に入った。

タクラマカン砂漠の西南端の町イエチエンを起点に、チベットのラサまで「新蔵公路」が通じている。この「新蔵公路」を使ってイエチエンから約530^{キロ}南下し、ここで公路を離れて東に、砂漠の中を直線距離にして約16^{キロ}入った地点にこの山のピークがある。右折する広大な谷間の奥に鎮座しており、残念ながら「新蔵公路」からこの山を見ることは出来ない。崑崙山脈の未踏の山を登るといのが我々の長年の夢であった。

「崑崙」という響きは、なんとなく東洋的で、シルクロードを彷彿させる。さらに、歴史とロマンを感じさせ、憧れてきた。

崑崙山脈の中から、我々の年齢と体力、そして技術力に見合う山を見つけるために、昨年9月にこ

6000^{メートル}以上の山で、ボツカ

不足を補うため車で高所まで入れること、難しい登山技術を要しないこと、そして何よりも「白きたおやかな山」であること、という我々の条件を満たしたのがこの山だった。

BCを招待所に

以後1年間、日本の山でトレーニングに励む一方、熟年登山隊であることを念頭に、タクティクスを念入りに検討した。

固定観念を捨て、BCをテントではなく「招待所」にしたのも検討の結果であった。結果的には、これが、全員元気で同時登頂という成果につながったと思う。

「招待所」は、バラックにベッドを置いただけの粗末な簡易宿泊所



ABC上部より望む6345メートルの未踏峰

だった。最初は、こんなひどい所がBCか、という印象だったが、時の経過と共に、屋根付き、お湯付き、しかも自由な空間付きという環境が、まさに黄金の御殿のようになっている。そしてこの御殿でじっくり静養し、英気を養うことができた。

BCである大紅柳灘(4265^{メートル})に着いたのは、成田を発ってから6日目である。その間、ジェット機を乗り継ぎ、四輪駆動車2台を使つての走行であった。途中3300^{メートル}～4900^{メートル}の峠を三つ越え、じっくり高度順化をしな

がらのBC入りである。

ABCからアタックまで

ABC(5440^{メートル})は、四輪駆動車での最高到達地点に設けた「新蔵公路」から離れ、砂漠の中ではスタックを心配したが、我々の四輪駆動車はここまで上つてくれた。

ABCからは、我々による登山だ。人力、馬、ロバ、らくだなどの手配は、地理的に困難である。

昨年の最高到達点5800^{メートル}にC1を設ける。ここから上部は、雪と岩の世界である。C1をベースに、更に6120^{メートル}まで登り、上部を偵察する。その結果、ピークまでのルートが明確に指摘できた。雪稜を辿れば、スノーバーやフィックスロープなどを使わずに、ピークに到達できそうだ。ルートを確認後、予定通り、全員BCに下り、1日半の静養をする。

BCで十分静養し、体調を整えた後C1に入る。次の日、6010^{メートル}にC2を設営して泊まり、翌日のアタックに備えた。

8月1日、珍しくガスが流れピークが見えない中、アタック開始である。左からの雪稜とのジャン

100周年記念事業 会員募金並びに有志募金の御礼とご報告(5)

募金委員会

左記の大学、企業、会員より募金をお寄せいただきました。大学名、企業名、お名前を掲載しお礼とさせていただきます。

1. 大学募金 (2校)

東海大学、青山学院大学

2. 企業募金 (6社)

住友生命保険(株)、(株)アーク・スリ
1・インターナショナル、田中倉庫(株)、(株)三恵、千葉ゼロックス(株)、(株)ツムラ

3. 有志募金および会員募金

へ有志募金

10万円以上 (1名)

奥野静子

5万円以上 (7名)

泉尾忠、青木巖、神崎忠男、山本健一郎、賛田統亜、城隆嗣、J A Cつくも会

3万円以上 (6名)

中村テル、松丸秀夫、高須梧郎、長谷川忠彦、山下康成、林善八郎

1万円以上 (13名)

井口謙司、平井一正、梅野淑子、伊藤祐道、河西邦彦、川里弘孝、

阪下幸一、江口欣也、中條昌子、加藤良三、緒方郁映、佐野正之、三宅國男

〈会員募金〉

9千円 (57名)

岡村一郎、高田誠、小原晴子、野田耕一郎、長沼雄志、瀧島清、大澤宣彦、板橋元一、梨羽時春、白川義員、梅本知栄子、田上敏行、葛谷凱治、小島高人、松本恒広、佐藤淳志、鈴木清、蓬田時男、平井和雄、広木孝一、蓬田三枝子、深田泰三、山本淳、松沢節夫、安井康夫、秋野子弦、小泉弘、鶴田佐知子、長田健三、佐藤英夫、廣永峻一、藤野和男、宮川流太郎、新井文男、村上清光、鈴木美代、堀内孝雄、北山久雄、今田明子、宮森実、菴谷利夫、渡辺誠、宮島順一、佐藤建、佐藤隆子、刈谷靖彦、岩田和夫、森永貴子、野中清義、佐藤康夫、高橋保夫、武田誠司、浅野巨寛、山並久次、浜田正敏、芝田稔、平野和夫 以上

(敬称略、8月末現在)

クシヨンまでは、ほぼ忠実に稜線を辿る。ここからプラトリーになり頂上に至るとというのが、今まで偵察をした我々の了解であった。ガスの中、どんどん高みを目指すうちに急に前が無くなった……。ここが頂上であった。

頂上にて

頂上では打ち合わせ通り、直径1.5mの円を描き、皆で「いち、の、さん！」で円の中に足を踏み入れた。午前11時5分、全員同時登頂の瞬間であった。

ガスが切れ薄日が射すと、白い



8月1日午前11時5分、初登頂の頂上にて

山々が累々と果てしなく連なる崑崙山脈が現れた。その巨大さに圧倒され、畏怖の念さえ覚える。日本から大事に持ってきた岳友の遺影を取り出し、周りの光景を見せた。かつて、志を共にこの頂を目指したが、3年前、大菩薩峠の登山口で急逝した岳友である。

下りは、登り以上に慎重に足を運ぶ。

その後、C2、C1、ABCと来た時と同じようにきれいに清掃して、撤収してきた。

最後に

今回の遠征は、我々だけで計画、実行した、手作りの遠征である。国内の個人山行のように、気軽にこなってきた。案ずるよりも産むがやすしの感である。

今後は、我々のように、気の合う者同士、小規模の、私的で質素な、貧乏遠征隊もどんどん出かけて行ってもいいのではないだろうか。そんな時代だと思う。

我々はこの山を「ユメ(夢)ムスターク」と名づけた。新山名を付した登頂証明書が、近々、カシユガル登山協会より送られてくるはずである。

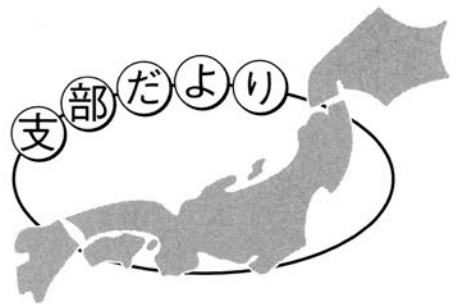
山形支部

夏山山行「西吾妻山」

山形支部の夏山山行は、7月23日、24日、吾妻連峰・西吾妻山(2035m)で行なわれた。16年度は「中央分水嶺踏査」登山が14回あり、支部事業単独山行は1年ぶりのことである。

早朝6時、参加者9名は車で米沢市白布温泉湯元駅に移動する。

湯元駅からロープウェイ始発に合わせ、予定通りのパノラマロープウェイ空中散歩となる。天元台高原駅で、簡単なセレモニー後、更にリフト3本を乗り継ぎ登山口に到着。登山口といっても標高1



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

820m、ここはもう主稜線である。雨季の今は、花の観賞には絶好の条件である。

大長老の水沢富一郎会員(永年会員)も参加されており、ベテランの名ガイドを受けながらの登山は、とても心強く有難い。

コメツガ林の中を登り、低木帯を抜けると展望が開け、大パノラマと花々の出迎えである。アズマシャクナゲ、コバイケイソウ、ワタスゲ、チングルマ、ツガザクラなど、夏の花が見ごろである。

やがて吾妻の見どころ、梵天岩、天狗岩などのゴロゴロとした大きな岩が現れ、遙かに隆起し乳頭を彷彿させる山、吾妻連峰盟主の西吾妻山に近い。

天狗岩で吾妻神社に拝礼、オオシラビソ低木林を登りつめると山



吾妻連峰最高峰の西吾妻山(2035m)にて

頂である。低木樹林帯にひっそりとたたずむ西吾妻山頂碑をバックに記念撮影をし、山を下る。

帰路は大凹のお花畑と、いろは沼を回って花を観賞し、吾妻の山の花旅を満喫した。

夜は名湯・白布高湯温泉で汗を流し、宿で懇親会を行なった。宴席は大いに盛り上がり、遅くまで続いた。

(菅原富喜)

信濃支部

第59回上高地ウェストン祭

6月4日、5日、第59回上高地ウェストン祭が開催された。ウェストン祭は、地元や支部会員など、多くの方々の協力のもとに行なわれている。

6月4日は記念登山(島々上高地、20m)である。島々の皆さんに、早朝から茶菓の接待を受ける。長年にわたり、この接待を続けてくださっている地元の皆さんには頭の下がる思いである。100年以上も昔、ウェストンがここに宿を取ったとき、純朴で心温まるもてなしに涙したという。

「今日は、最近では珍しく良い天気だが、昼ごろ雪が降るかも……」

と地元の人々の声である。この予報はズバリ的中。峠ではあらが降ったという。300人近い参加者は冷たい雨に遭ったものの、全員無事に8、10時間の徳本峠越えを行なった。この中には、安曇野小・中学校の生徒も参加しており、記念山行に花をそえた。

5日は碑前祭である。今年は、安曇村が松本市に合併して初年度であり、日本山岳会創立100周年と相まってのメモリアルイヤーとなった。多くの来賓の方々と、山を愛する200人近い人たちが集った。創立50周年を迎えたエーデルワイスクラブの歌声に導かれ、献花と一連のセレモニーである。「ウェストン祭の歌」は、詩人でもあった尾崎喜八二代目支部長が作詩し、自ら朗読していたものである。その詩が、百田会員によって朗読された。そして、支部長に続き平山会長と市長の挨拶の後、安曇野小学校4年生9名の清らかな歌声が上高地の空を貫いた。

その後、平山会長による「私の上高地」と題した記念講演が行なわれた。その中で、昭和27年、大雪山山岳部時代に初めて上高地を訪れたこと、そして北アルプスやヒ

マラヤ、南極へと話が派生し、山への挑戦の過程を語った。合わせて人と自然との共生、生涯登山の楽しみ方などにも触れ、硬派で力溢れる話となった。

ウエストンの業績を顕彰し、感謝し、そのパイオニア精神を受け継ぎ後世に伝えていく、これがウエストン祭と考える。いくつもの歴史を残して今があり、先輩岳人の徳を称え、末永く続けていくこと、これが歴史ではないだろうか。来年は60回、上高地で会いましょう。

(中野和郎)

山梨支部

第1回山の博覧会

日本山岳会創立100周年を記念して、7月9日、甲府市・山梨学院大学メモリアルホールで、第1回山の博覧会「山を知ろう、山へ行こう」を開催した。

山の博覧会は、本部100周年と、08年に迎える支部60周年記念事業として計画された。

午前中は羽田栄治会員の解説で、山岳映画「雪の薬師、槍越え」(大正12年の北アルプス)と「雪の赤石岳」(大正13年の南アルプス)を

上映。

午後は渡邊玉枝会員が「山登りの楽しさ」、柳沢昭夫会員が「登山の発展と安全技術」、永田秀樹会員が「山の魅力——シベリアとカラコルムから」と題して講演を行なった。

支部では、地方における登山と山岳文化の普及・振興を目的に、100周年兼60周年事業委員会を設置した。事業部門は山岳総合講座を目標に準備を進め、山梨県生涯学習センターや、山梨学院大との連携を成立させた。準備の過程では、登山や山の自然にかかわるネットワーク作りも目指した。総合タイトルを「山の博覧会」とし、08年まで年1回、4年間の継続事業とした。

開催にあたっては様々な苦労があった。会員80名余りの支部の最大の難関は、参加者の確保だった。一人でも多くの人に聞いてもらいたいと、400人の参加を目標に設定した。動員目標を設け、支部長が檄文を送るなど、かつてない取り組みとなった。その結果、当日の参加者も含め423名の参加者を得た。

今後は、06年は自然系、07年は

文科系、08年はレスキューなどのノウハウの講座、作品展、登山用品フリーマーケットといったフェスティバルを予定している。

今回の参加者には、山梨学院大や山梨大の山岳部学生の参加があったものの、ほとんどが中高年であった。今後は、若い人が参加しなくなる企画も課題と考えている。

(深沢健三)

京都支部

大文字ビアパーティー

京都支部では、7月の最終土曜日に大文字山でビアパーティーを開くのを恒例にしている。今年も7月30日、21人の参加者で開催、通算17回目となった。

大文字山は、東山三十六峰の主峰、如意嶽中腹山域の称である。

西に開けたその三角面に、毎年8月16日、大の字に並べて積まれた薪が燃やされる。京都五山送り火のひとつである。その大の字の中心、標高350¹地点に弘法大師のお堂(堂宇ではなく、窟である)がある。その前の広場で宴を開く。

正面西側には愛宕山・京都西山、右の北側には比叡山・京都北山・

丹波高原、左の南方遙かに生駒山、そして眼下には京都盆地が一望に収まるという、天下の絶景である。陽が愛宕山に没した午後6時30分、斎藤惇生元会長の発声で宴が始まった。広げたグランドシートの真ん中に、女子会員手作りの料理と、男子会員持参の料理が並び、それをコップ片手に、バイキングのような気分でご馳走になる。

空に星が瞬きだす頃、地面に敷かれた銀砂子は次第にその輝きを増し、渡る風は頬に心地よい。この風情は、ビルの屋上ビアガーデンとは雲泥の差である。

参加者のひとりから「こんな愉快な催しを京都支部だけでやるのはもったいない。ぜひ『山』の支部だよりに投稿し、全国の会員に知ってもらわなきゃ」との弁を受け、ここに紹介する次第である。

鬼に笑われるかもしれないが、来年は7月29日午後5時30分、銀閣寺門前集合予定である。宴は午後9時ごろまで続く。自分の飲み物とヘッドライトをお忘れなく。御地名産の一品の差し入れ大歓迎である。

(中島道郎)

報告

9月

Report

日本山岳会の各委員会、
同好会の活動報告です

科学委員会

探索山行・北方系植物観察と四阿山登山

これまで、緯度・高度でその土地の気象や動植物の分布などを考えがちであったが、今回の探索山行でその認識を改めた。

6月18日、池袋をバスで出発。菅平に着く頃には梅雨空も晴天となる。芳野委員の案内で、自生地での「ツキヌキソウ」を観察する。「ツキヌキソウ」は数万年前の間氷期の植物で、日本では菅平だけに残る天然記念物である。

現地参加組と合流、総勢23名で筑波大学菅平高原実験センターを訪問。センター長の徳増教授より「菅平高原の自然と生物」の講演を受ける。

菅平の緯度は、石川県金沢、茨

城県常陸太田とほぼ同じであるが、年間の平均気温は北海道稚内に近い。これは四阿山などの山々に囲まれ、その冷気が盆地である菅平に集まるからである。そのため、本州では最後まで氷河期の気象が残り、北方系の植物が見られるということだ。

次に、寒冷湖である「菅平湿原」(天然記念物)で、北方系植物や地名の由来である菅の群生の中を散策した。

続いて、電気通信大学菅平宇宙電波観測所へ向かう。芳野委員が昭和43年に創設し、センター長として研究を続けてきた所である。

富沢先生より、施設の案内と観測テーマの説明を受ける。非対称のパラボラアンテナや、太陽風の観測解析、地殻変動に伴う電磁放射の観測等、目頃耳にしない話に



電気通信大学菅平宇宙電波観測所にて

多少頭が混乱する。

宿泊は付属の宿泊棟で、夕食にアルコールも入り楽しい歓談となった。

6月19日晴れ、8時過ぎに牧場横の登山口より、4つのグループに分かれて四阿山を目指す。今の季節が一番と言われるように、満開のレンゲツツジが道の左右を埋め尽す。高度を上げるにつれ、高山植物のナルコユリ、アズマギクの可憐な花が姿を見せる。3時間ほどで山頂に到着した。残念ながらガスで眺望はきかない。昼食後、記念写真を撮る。

下山は、菅平盆地を見下ろしての気持ち良い山歩きとなった。バ

スに乗ったところで激しいにわか雨となる。ラッキーとはこのことか……。前泊の施設で汗を流し、のんびりと帰京。

今回お世話になった筑波大学・電気通信大学各関係者の方々に改めて感謝申し上げる次第である。

(大友裕美)

事業委員会

楽しかったJAC山行デビュー

日本山岳会に入会した頃、年費の負担が心配で我が家の家計を握っている妻に相談したものであった。しかし、そんな思いで入ったものの、ガイダンスにも出席せず、毎月送られてくる『山』もチラリと見るだけで、長い間幽霊会員を続けていた。

そんなある日、知り合いから事業委員会山行への誘いのメールがあった。目的地は鳥海山と栗駒山。鳥海山はアプローチしにくい矢島口からのルートだったこと、栗駒山は会社のワンゲル部の女性に、先を越されて悔しい思いをしていたこともあり参加した。

7月16日、朝早い出発でもあり



鳥海山山頂にて

車中は寝ていこうと決めていた。しかし、車窓から見る風景は目新しく、初めて会う人達との話も興味深く、寝てはられない車中となった。初日の宿は鳥海荘である。露天風呂から鳥海山が見えるはずだが、上半分は雲に隠れて見えない。しかし、中腹にある残雪が何か所も眺められた。

17日は矢島口へ移動。被川ヒュッテの先は竜ヶ原湿原である。湿原を渡る風が心地いい。その先からはいよいよ雪溪となる。急斜面をキックステップで登る。振り返ると、七つ釜避難小屋の赤い屋根が見えた。その後も、夏道と雪溪を交互に歩く。途中からガスが湧

いてきて、見晴らしはなくなった。最後の舍利坂はなかなかきつい登りで、やつとの思いで七高山に到着。時折、強い風が吹く中、記念撮影、昼食後に下山。

18日は栗駒山登山である。須川高原温泉の裏から登り始めるが、横を流れる温泉の臭いがきつい。ムシ風呂の横を通って名残ヶ原へ。湿原は開放感があつて気分がいい。

連続講演会「語り継ぐ 黎明期の登山…それぞれの山」 第5回 松丸秀夫さん「山日記から見えてくる日本山岳会」 資料映像委員会

松丸秀夫名誉会員は「山日記」の編纂に長い間携わってこられました。「山日記」は1930年に誕生し、1989年までに53号を発行。多くの岳人に「赤い表紙の山日記」と呼称され、愛され、指針として貢献しました。その「山日記」にスポットを当て、日本山岳会の歴史を検証し、覗いてみようというのが講演のテーマです。100周年の節目に、「日本のアルピニズムを勃興させよう」という先人達が抱いた創立の心に触れ、これからの組織のあり方や方向性を考える一端として企画しました。懐かしい「山日記」、はじめて目にする「山日記」……想いはそれぞれでしょう。当日は希少な「第1号山日記」を映写、他号の「山日記」なども展示予定です。

- ◆日時 11月3日(木) 14時20分～16時30分(入場は13時30分より)
*山日記の展示は13時30分～16時40分
- ◆場所 東京都体育館第1会議室(JR中央線「千駄ヶ谷」駅下車1分、都営地下鉄大江戸線「国立競技場」駅下車A4出口前)
- ◆定員 120名(当日の受付可。なるべく事前にお申込みください。会員外の参加も可、無料です)
- ◆申込み問合せ 郵便、メール、FAXにて会員番号、氏名を記入のうえ下記へ
*奈良千佐子(〒150-0001 渋谷区神宮前3-29-11 FAX 03-3402-6014
✉ mt.chisako@mbc.nifty.com)
- ◆講演会終了後に懇親会を予定しています(17時～19時)。参加希望者は10月20日までに、合わせてお申込みください。

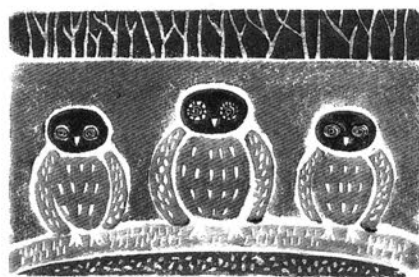
新・「世界の山旅・辺境の旅」シリーズ



国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 ⑤ボンド保証会社
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

小沢を渡って地獄谷に沿って登る。今日は梅雨にしては良い天気だが、遠望はきかない。昭和湖で小休止。コバルトブルーの湖面が美しい。天狗平経由で栗駒山へ。山頂に埋設された三角点の1等の文字の部分が欠損していたのが残念だった。初めて参加したJACの企画であつたが、この3日間の山行は、印象に残る楽しいものとなった。親しい人もでき、昔話もいろいろ聞くことができた。今まで企画に参加しなかったことが悔やまれた。今後は積極的に参加しよう、と自分に言い聞かせた。(引間恭夫)

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

大島亮吉・著／大森久雄・編
『(新編) 山 紀行と随想』



2005年7月
平凡社刊
367頁
定価1470円

平凡社ライブラリーは、山岳名著といわれる本を手頃な体裁と価格で、私たち読者に届けてくれる。そのシリーズから新しく登場したのが本書。

大島亮吉は1899年生まれ。慶應義塾山岳会に所属し、大正後期から昭和初期にかけて積雪期登山、岩登りの先駆的な活動をする。彼が伝説的に語られ、ファンが

多いのは、28歳の若さで前穂高岳から墜落して死亡したことに併せ、死後に残された膨大な文章の、その幅広さと瑞々しさにある。編者はその魅力をも「文武両道、和魂洋才の山の先蹤者」と位置づける。

大島が若くして亡くなったため、文章が本の形で世に出たのは(会報に発表したものを除いて)すべて没後である。本書は、仲間たちの手で編集された『山 研究と随想』をベースにしているが、随想の部分が大大幅に差し替えられ、編者曰く「大島の持つ穏やかで優しい世界」の真髄を届けてくれる。

解説の中で、生前の大島の姿が語られる。人一倍精力的に山に登り、西欧の登山文献を読みあさり、考える傍らから記録に書き留める。まるで早い死を予感し、生き急ぐかのような。そして、理屈っぽい面を見せるかと思えば、一方でロマンチズムに走りすぎた、一種の「機能不全」をあちこちで起こしたままの文章が残される。

ところで彼が天寿を全うしていれば、この生のままの文章の数々が、私たちの目に触れることはなかったかもしれないと考えると皮肉だ。実は、生のまま残された、

若い大島の「機能不全」こそが、本書の魅力なのかもしれない。

(三好まき子)

『古道巡礼』

高桑信一・著



2005年1月
東京新聞出版局
四六判415頁
定価2100円

あるとき、地図に記されていない径と出会った。それは仕事道と呼ばれる暮らしの径だった。そういう径に出会うたびに、径の行く先が知りたくて、惹きこまれるようにして足を踏み入れるのが常だった。登山道という制約を嫌いながら、忽然と現われる暮らしの痕跡の山径に、たとえばようなない親しみと興味を覚えたからである。

(本書ははじめにより)

著者は、この親しみと興味を追求するために、テントと食料を背負って径を探し求めた。

会津と越後に結んだ歴史の街道「八十里越」、津軽白神「マタギ道」、古代東北の謎を秘めた「仙北街道」、越後下田の「砥石道」、山中に消え

た幻の集落をつなぐ「足尾根利山の索道」、首都圏の水瓶に残された「奥利根湖岸道」、白湯山信仰の「会津中街道」、電源開発の道「黒部川日電歩道」、早出川に沿ってつづいた「松次郎ゼンマイ道」、陸の孤島を支えた開拓の道「北海道増毛山道」、海と山を結ぶ生命線だった「米沢街道大峠の塩の道」、信仰によつて結ばれた「熊野古道小辺路」、一攫千金を夢見た鉱山の光と影の「鈴鹿千草越え」、再び「八十里越の裏街道」……以上14の径を分け入って、紡ぎ出されたルポタージュが本書である。

少ない文献や古文書より得た資料、地元の古老から得た知識、著者の永年の道さがしの勘と想像力をもとに、これらの径を辿り、手作りの地図と大量の写真で追跡している。

山頂をめざして登山道を歩く人々が普通であるが、径の概念を考えなおす一文である。著者にはまだ歩きたいと願っている径があるそうで、続編が楽しみである。

辞典によれば「径」は「道」、「路」と記されるが、その使い分けに思いを込めて書かれている。巡礼者・高桑氏の心意気か。(茂見猛)

高澤光雄・編

『山の仲間と五十年』
秀岳荘創業五十年記念誌2005年4月
秀岳荘発行
177頁
定価1050円

昭和20年代、日本に山道具の専門店といわれる店が、東京と関西に数店しかなかったころ、札幌に金井五郎氏が創設したのが秀岳荘である。

最初は内職だった縫製品が主だったが、その頃から北大山岳部との結びつきが大きかったようである。「私の店は北大山岳部に育てられたと、今でも信じています」と金井五郎氏は言っている。

また当時は、東京の岳人が日高の山、知床の山に行くにはアプロイチに数日間かかった。秀岳荘が本州からの岳人のデポの役目を果たしていた。北海道にありながら、全国的な山の専門店であった。

その秀岳荘が、昭和37年、PR誌として「山の素描」を創刊、題字は坂本直行氏が書き、編集は山口透氏である。伊藤秀五郎氏が「発

刊に寄せて」で「山の仲間の気軽な談話室」と記しているが、15年間で通巻45号、執筆者は185名に及んでいる。今回の50年誌は「山の素描」が大いに影響している。

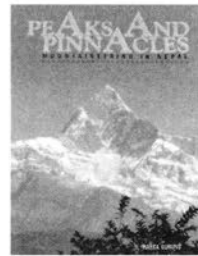
1部の「山の仲間」は、現在も秀岳荘と関係の深い岳人諸氏が、それぞれのテーマで執筆している。2部は「再録、山の素描抄」として、10氏の文を再録している。終

わりに執筆者185人の総目録が記されている。3部の「秀岳荘50年のあゆみ」は、主として登山用具の変遷と、金井五郎氏の遺稿集である『秀岳荘史』。特に「門田ピッケル三代記」と、「ハガスキー誕生物語」は登山用具の歴史としては貴重な資料である。4部の「北海道登山史年表1871-2003年」は、日本山書の会発行の「山書研究」の平成4年版に、山岳団体等の協力で追加項目の提供を受け作成されたものである。

山の専門店の50周年記念誌としては、少なくとも初めてのことと思われるが、バラエティーに富んだ執筆者に驚かされた。

なお別冊として「山の素描」の執筆者たちとして編者が25名の執筆者の紹介をしている。(茂見猛)

Haruka Gurung・著

『Peaks and Pinnacles』
—Mountaineering in Nepal—2004年
ネパール登山協会
218頁
定価10USドル

ハルカ・グルン氏はネパールの元運輸・観光大臣、ネパール登山協会(NMA)の元会長、現顧問である。中・日・ネパール三国友好サガルマタ(チョモランマ)登山隊のネパール側隊長を務めたので、日本でもその名はよく知られている。本書はネパール・ヒマラヤの山岳と登山に関し2部構成からなり、興味深い付録もある。

第1部は「アンナプルナからダウラギリ(1950-60)」とされ、エヴェレストはじめネパール・ヒマラヤの8000メートル峰の初登頂を中心として、ヒマラヤ登山の「黄金時代」をクロニクル風にまとめている。これは同氏が以前に執筆した同名の著書(ネパール政府情報省刊、1968年)に訂正、補筆したものである。

本章の特色として、日本の登山隊の活動に関し、『山岳』などの文

献を駆使し、マナスル登頂などを正確かつ公平に扱っている点である。

第2部「Mountain Miscellany(山の雑録、とても訳すべきか)」は、ヒマラヤに関する様々な話題が同氏の実証的な調査によってまとめられている。たとえば、マチャプチャレが山麓住民にとって聖なる山というのは正しくないことだとしている。またヒマラヤの無名峰に、外国登山隊が英語などで勝手に名前をつけたものを、的確な現地語(ポティア語)で自ら名づけ、それを一覧表にしている。

興味深いのは、外国登山隊がネパールに経済的にどれほど寄与したかを、ロイヤリティ(登山料)の合計金額や、雇用したシェルパへの支払い経費などを計算していることである。

同氏も言っているように、ヒマラヤ登山の完璧なクロニクルを作るには情報が多すぎ、かつ、錯綜しており不可能である。この点で、カトマンズ在住のエリザベス・ホーリー女史のライフワーク、CD版「ネパール・ヒマラヤ登山隊の記録」(仮訳)がこれを補ってくれるだろう。(神原達)

会務報告

7月理事会

日時 7月13日18時30分～20時40分
場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、賛田・吉永各常務理事、石田・篠崎・大蔵・野口・斉藤・藤井・渡邊・石橋・古野各理事、小倉・重廣・今村各常任評議員

〔委任〕一力・山本各監事

〔審議事項〕

1 組織改革(案)について

別添資料により6月理事会より引き続き検討、意思決定機関としての理事会と、執行委員会としての各委員会を区分し、とりあえず実行する。(承認)

2 平成17年度第1・四半期の財務状況について

●会費収入 5002万1000円 (対予算Ⅱ75・45%)

●支出 1860万2071円

(対予算Ⅱ20・36%)

●ほぼ前年同期並みである。

3 総務・財務担当者について (承認)

事務量の増大に伴い、補助者を左記のとおり選任した。

●総務Ⅱ斉藤理事

●財務Ⅱ石橋理事

4 ルーム交換・鑑定結果

かねてより交渉中であつた201号室(日本山岳会所有)と104号室(日本山岳会賃借中)の交換について、監事の指示等に基づき鑑定評価を依頼していたが、鑑定結果が左記のようになった。この結果を104号室所有者に示し、交換交渉を進めることとした。

●201号室Ⅱ3900万円

●104号室Ⅱ3700万円

5 創立100周年記念事業関連

①式典計画の進行状況について

7月に開催の有識者会議の状況を踏まえ、特に外国招待者の対応について報告があつた。(承認)

②特別表彰について

創立100周年を記念した特別表彰のあり方について検討結果を報告、8月理事会に素案を提示することとした。(承認)

6 マナスル初登頂50周年記念事業委員会委員について

ネパール側からの呼びかけを踏まえ、左記の委員で検討することとした。

とした。(承認)

●委員長Ⅱ田邊副会長

●委員Ⅱ大蔵・吉永各理事、宮原・神崎・小川各会員

7 秩父宮記念山岳賞審査委員について

17年・18年度の審査委員を左記のとおりとした。(承認)

村木・斎藤各名誉会員、平林・田邊・橋本各副会長、長尾・宮下(啓)・松浦・竹内・山口各会員、事務局(吉永常務理事)

8 海外登山基金委員会について

17年・18年度の委員を左記のとおりとした。(承認)

●委員長Ⅱ古野理事

●委員Ⅱ宮崎・小川・黒川・貫田各会員

9 契約↓カシオ計算機(株)

100周年記念腕時計売買契約および個人情報秘密保持に関する契約を締結した。(承認)

10 後援依頼↓山梨県立文学館企画展「山の文学展」(9月23日～11月27日)

11 写真貸与願↓(株)テレビマンユニオン

7月30日(土)放映の「世界・ふしぎ発見」でのマナスル初登頂等の

写真貸与 (承認・有料)

12 推薦および名簿使用願↓(株)山と溪谷社

『目で見る日本登山史』に対し、本会の推薦と発行宣伝のための会員ラベルの打出し願があつた。

会員ラベルの使用については、発行図書宣伝に限定、および個人情報秘密保持を条件とし、契約を締結することとした。(承認・有料)

〔検討事項〕

1 ルーム改築計画について

平山会長よりサロン・会議室の新設等の改築計画概要について説明があり、100周年記念式典終了後を目途に改築費用等について詳細に検討することとした。

2 会員減少対策について

山本監事より、会員減少は将来の財務に直接影響する重要事項であり、担当委員会を設置し、真摯な検討を加えるべきとの意見があつた。今後理事会で対策案について、継続して検討していくこととした。

〔報告事項〕

1 6月23日、100周年記念行事実行委員会(式典計画、海外登山計画、分水嶺踏査、百年史発行の進捗状況について)の報告

- (平林副会長)
- 7月4日、100周年記念シンポジウム「山での救急蘇生を考える」の報告 (野口理事)
 - 7月8日、山岳4団体懇談会 (平山会長・田邊副会長出席) の報告
 - 18年度は本会が幹事団体となる。 (田邊副会長)
 - 7月10日、ネパール皇太子殿下来日歓迎会の報告
 - 本会が協賛しており、20名が参加した。 (吉永常務理事)
 - 7月12日、委員長会議の報告
 - 組織改革に伴う執行部門長会議で、今後2カ月に1回程度の頻度で開催し、理事会等との意思疎通を図ることとした。 (平林副会長)
 - 『山の救急医療ハンドブック』の発行報告
- すでに市販されているが、100周年記念式典参加者へ配布される予定である。 (野口理事)
- 8月理事会**
- 日時 8月10日18時30分～20時40分
場所 日本山岳会会議室
- 〔出席者〕平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永常務理事、篠崎・大蔵・斉藤・渡邊・古野各理

- 事、小倉・今村各常任評議員、山本監事
- 〔委任〕賛田常務理事、石田・野口・藤井・石橋各理事、重廣常任評議員、一力監事
- 〔審議事項〕
- 創立100周年記念事業関連
 - 募金状況 (17年7月末現在) 5990万6890円
 - 財務状況
 - 17年7月末現在総支出 1819万8747円
 - 17年8月繰越金 4170万8143円
 - 式典関連進捗状況
 - 式典委員会の神崎委員長より、式典・祝賀晩餐会の実施内容、外国招待客・国内招待客への案内等につき説明があった。講演会の内容等について未定の部分があるので、早急に検討し、式典・祝賀晩餐会の全容を9月理事会で決定することとした。 (承認)
 - 特別表彰について
- 平林副会長より検討状況につき説明があった。全体として518名の個人・団体が対象となっており、表彰者、表彰方法について9月理事会で決定することとした。 (承認)

- ルーム交換交渉経過
 - 201号室 (日本山岳会所有) と104号室 (日本山岳会賃借中) の交換について、鑑定結果を104号室の所有者に提示して交渉中であつたが、8月4日先方より等価交換に応ずる旨の返答があつた。交換後の201号室の賃借希望、交換に伴う費用の負担等につき明確にした上で、交換を進めることとした。これに伴い、現在賃借中の211号室を期間満了の10月に解約すること、交換後の104号室の改修および交換、賃借後の201号室の一部改装を行なうこととし、早急に工事見積りを依頼することとした。 (承認)
 - 委員会担当について
- 今般の組織改革に伴う会長担当の委員会 (6委員会) を除く委員会の担当副会長を左記のとおりとした。
- 平林副会長 自然保護
 - 橋本副会長 青年
 - 田邊副会長 事業、図書、指導、医療、科学、学生部指導
 - 吉永総務理事 海外 (総務委員会に国内・外関連団体交流小委員会があるため) (承認)
- 4 後援等

「世界一美しい谷、ランタン谷」

ランタン谷は探検家ティルマンにより世界一美しい谷と称されています。ランタン山群のヤラピーク5,520mは氷河の山ですが、比較的簡単な技術で登頂が可能です。トレッキングのアップローチには往復共にヘリコプター利用。ゆったりした日程、頂上からはランタンリリム、ガンチェンポ、シジャバンマなどを見ることが出来ます。

◎ランタン・ヤラピーク登山 (往復ヘリ使用)
10月28日～11月9日 13日間 ¥438,000

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業 1662号
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8 山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-mail info@everest.co.jp



- ①ヒマラヤ観光開発 (株) ↓9月3日「ヒマラヤの集い」講演会名義後援 (承認)
 - ② (株) 美術出版社 ↓山岳会所蔵の下藤次郎氏関係書籍の写真撮影 (承認・有料)
- 〔報告事項〕
- 7月14日開催、創立100周年記念事業委員会の報告
 - 募金状況、式典計画、中央分水嶺踏査状況等について報告し、各委員より意見を戴いた。
 - 7月16日～17日開催、九州ブロック式典の報告 (平林副会長)

●宮崎県「えびの高原荘」で開催された。
(会長)

3 7月22日開催、創立100周年記念シンポジウムの報告

●東京都体育館において「1970年以降のヒマラヤ登山隊の果たした役割とは」をテーマとして実施された。
(平林副会長)

4 7月23日、24日開催、東九州支部分水嶺踏査完了記念登山大会の報告
(会長)

5 7月28日開催、マナスル初登頂50周年記念事業委員会の報告

●06年5月9日、カトマンズでの記念レセプション、トレッキング等の記念事業計画について検討中である。
(田邊副会長)

6 7月の新入会員は13名

ルーム日誌 7月

2日 土曜会

4日 総務委員会

5日 図書委員会 事業委員会

アルパインスケッチクラブ

6日 会報編集委員会 100周年フォーラム委員会 山岳地理クラブ

7日 フォトビデオクラブ 山の

自然学研究会

緑爽会

8日

事業委員会 100周年式典委員会 100周年募

金事務局会議 アルパインスキークラブ

11日

各委員会委員長会議 J A C 01会 九五会

12日

理事会 山想倶楽部

13日

学生部 青年部 100周年フォーラム 休山会

14日

アルパインスケッチクラブ

15日

百年史委員会 資料映像委員会 事業委員会 山研委員会 インターネット小委員会

19日

三水会 つくも会

20日

100周年募金事務局会議 科学委員会

21日

100周年募金事務局会議 山遊会 00会

25日

常務理事会 アルパインスキークラブ

26日

自然保護委員会

27日

土曜会

28日

評議員会 7月来室者612名

30日

今年もさくらで会いましょう

ルーム日誌 8月

1日 総務委員会

2日 図書委員会 つくも会

3日

会報編集委員会 高尾の森実行委員会 山岳地理クラブ J A C 01会

6日

三水会

8日

アルパインスキークラブ

9日

100周年記念式典委員会 専門委員会会議 アルパインスケッチクラブ

10日

理事会 つくも会 休山会

22日

マナスル登頂50周年記念実行委員会

23日

インターネット小委員会

24日

中央分水嶺委員会 アルパインスキークラブ 00会

25日

常務理事会 学生部指導委員会 ゆきわり会 03同期会

29日

山遊会

30日

財務委員会 100周年記念式典委員会 九五会 8月来室者280名

■会員異動(7月)

物故

今井洋地 (9315) 05・7・31

退会

森丘 實 (8555) 富山

木村 武 (11228)

遠藤京子 (13001)

高宮弘子 (13717)

市川光宏 (13895)

■会員異動(8月)

物故

子古格郎 (8054) 05・8・9

退会

西岡 譲 (11138) 北九州

G S パウデル (12456)



倉岡啓吉

あつあん山にて

図書受入報告 (2005年6~7月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	出版年	寄贈/購入別
富山県立山博物館(編)	山嶽活寫——山岳映画の先駆者、伊藤孝一没後50年(立山博物館平成16年企画展)	64pp/30cm	富山県立山博物館	2005	羽田栄治氏寄贈
村口德行	4 度目のエベレスト (小学館文庫)	221pp/16cm	小学館	2005	著者寄贈
熊本日日新聞社(編)	脊梁50名山	199pp/21cm	熊本日日新聞社	2005	JAC熊本支部
山森欣一	欣ちゃんの山一辺倒	375pp/20cm	アテネ書房	2005	出版社寄贈
大森義彦	健康長寿登山——「生涯登山」を楽しむトレーニング講座	195pp/21cm	東京新聞出版局	2005	出版社寄贈
菊地敏之	クライマーズ・ボディ	192pp/21cm	東京新聞出版局	2005	出版社寄贈
村山雅美	地の果てに挑む——マナスル・南極・北極	255pp/20cm	東京新聞出版局	2005	出版社寄贈
斉藤誠	デジカメで山を撮る	158pp/21cm	東京新聞出版局	2005	出版社寄贈
谷口凱夫(編)	翼を持ったお巡りさん——ヘリ救助にかける富山県警察航空隊の現場から	254pp/18cm	山と溪谷社	2005	出版社寄贈
近藤辰郎	槍ヶ岳讃歌——孤高の峰を見つめて (近藤辰郎写真集)	111pp/23cm	山と溪谷社	2005	出版社寄贈
北山真・杉野保他	フリークライミング(ヤマケイ登山技術全書 No.7)	165pp/26cm	山と溪谷社	2005	出版社寄贈
ザイベルト(著)松田展夫(訳)	やさしく登れるアルプス3000m峰ガイド(ヨーロッパアルプス・ハイキングガイド)	167pp/21cm	山と溪谷社	2005	著者寄贈
谷山宏典	登頂8000メートル——明治大学山岳部14座完登の軌跡	326pp/21cm	山と溪谷社	2005	明大炉辺会寄贈
大島亮吉(著)大森久男(編)	(新編)山 紀行と随想 (平凡社ライブラリー No.545)	367pp/16cm	平凡社	2005	出版社寄贈
鈴木清	富士憧憬——ふるさと富士を訪ねて北海道から九州まで	191pp/20cm	文芸社	2005	出版社寄贈
Stephen Venables	Everest —— Summit of Achievement	252pp/30cm	Bloomsbury Pub.	2003	中村保氏寄贈

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆100周年記念式典

関西支部

世界遺産の紀伊山地・高野山で開催。河口慧海と役行者についての講演と、支部の70年の歩みについて語り合います。翌日の記念山行は、①檀上伽藍②町石道③女人道④高野三山を予定しています。全国各地から奮ってご参加ください。

日時 11月5日(土)13時30分

開催地 和歌山県高野山

テーマ 「日本の登山文化の原点を考える」

申込 関西支部 (〒537-0014 大阪市東成区大今里西2-5-12 大阪セルロイド会館205号)

8067 FAX 06-6971-1067

※詳細は「山」5月号4ページに掲載されています。

※詳細は「山」5月号4ページに掲載されています。

※詳細は「山」5月号4ページに掲載されています。

※詳細は「山」5月号4ページに掲載されています。

※詳細は「山」5月号4ページに掲載されています。

※詳細は「山」5月号4ページに掲載されています。

※詳細は「山」5月号4ページに掲載されています。

◆公開セミナー「通信機器の進歩と応用・安全登山の一助として」

科学委員会

携帯電話、GPSなど山岳通信機器の応用と安全登山について、芳野越夫氏を中心にセミナーを開催します。

日時 11月5日(土)13時~17時

場所 「東京しごとセンター」地下講堂(飯田橋) 電話03-5211-2307

費用 500円(資料代)

*申込は不要です。

問合 箕岡三穂宛 FAX 042-776-1178

6-11788

◆「晩秋の熊野古道を歩く」

事業委員会

熊野古道は、自然と人との深い関わりの中で形成された「文化的景観」を高く評価され、世界遺産登録を受けました。この晩秋の熊野古道を、いにしえを訪ねて歩きます。大雲取越え、小雲取越えに加え、中辺路の王子、那智大社、那智の滝、本宮大社を巡ります。

日時 11月20日(日)~23日(水)

集合 紀伊勝浦駅 20日14時

又は那智山 20日17時

解散 新宮駅 23日 14時30分

日本山岳会創立百周年記念出版

日本全国四〇〇〇山の情報を網羅!

10月下旬刊行!



予約受付中!

(会員割引あり)

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集

菊判(1992頁)上製/クロス装/カバー掛け/函入り 定価18,900円(税込)

折込・国後など北方四島の山から、南西諸島の山々まで、日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。日本山岳会の全国25支部約500名が総力をあげて編集執筆にあたった最新・最大の山岳百科が、ついに完成!

△推薦のこぼ△
日本山岳会二代会長高頭式氏による「日本山岳誌」から百年、山岳の現況を記述し後世に残すべく、百周年記念事業として本書ができました。
日本山岳会会長 平山 善吉

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地

Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095

URL http://www.nakanishiya.co.jp/

費用 3万5000円(宿泊3泊、現地交通費、懇親会費、通信費、保険料)

定員 20名

申込 10月20日までに植木淑美宛 (〒195-0053 町田市能ヶ谷町1151-154) FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

申込 10月20日までに植木淑美宛 (〒195-0053 町田市能ヶ谷町1151-154) FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

1151-154 FAX 042-1734-1149

き続き、さらに西の和歌山・石垣根来断層、高野口断層、紀ノ川構造帯を見学します。

日時 11月4日(金)~5日(土)

出 4日朝、東京駅より新幹線利用

費用 実費3万円(交通・宿泊費、資料代)

定員 8名まで

申込 国内交通傷害保険に加入

10月15日までに住所、氏名、電話・FAX番号を明記し

舟根章宛 (FAX 045-184215622)

※申込者に詳細案内送ります。

※申込者に詳細案内送ります。

※申込者に詳細案内送ります。

※申込者に詳細案内送ります。

※申込者に詳細案内送ります。

● さんけん通信 ●

上高地からのご挨拶

山研管理人 内野慎一・かおり

今シーズンより山研の管理人として暮らしています。ここで働けることを、私も妻も、娘のあすみも(1歳半、まだ話せませんが)嬉しく思っています。

「上高地は結構暑いなあ……」というのが、昨年までさらに1000m高い山小屋で過ごしていた私たちの一致した感想です(もっと暑い下界の皆さんゴメンナサイ)。そのため、数少ない私の半袖シャツはフル回転です。

そんな上高地からの話題を2つお届けします。

1つめは、前の管理人の木村太郎さんについてです。木村さんは、五千尺ホテルにブースを構え、ネイチャーガイドとして活躍しています。先日、山研のミニ水力発電の観察に、ネイチャー教室の子供たちとともにやって来ました。ノズルを開けると水車が回り、電球が点灯する様子に、子供たちから歓声があがりました。さらに、放水パイプから流れ出る水のものすごい勢いに驚いていました。電気の仕組みは解らなくとも、この実体験は彼らのなかに確かに残るだろうと思いました。

また、木村さんによると夜のウォーキングガイドが人気なそうです。たしかに上高地の夜は、昼間の雑踏が嘘のような別の表情を持っていま



山研でお会いしましょう！

す。朝夕もそうです。これは泊まってみないとわからないことでしょうね……。このことは、私たちもここに暮らしてみても、大きな発見でした。

2つめは6月末～7月初めの大雨についてです。ある朝、沢から引いている水の量が極端に減っていることに気づきました。大慌てで水源に向かうと、なんと取水口が半分以上砂に埋まっていた。大雨のため、多量の砂が一気に流され積もったようで、豪雨の力を見せつけられました。かなりの水量があり、上腕も長靴の中もビッショリと濡らしながら、取水口を砂から引っ張り出しました。手足が痛いくらい冷たかったのですが、丁度、沢渡で土砂崩れがあった直後であり、これくらいのことは当然だな、と納得しました。

その国道も、7月28日より開通しました。しっかりした道が復旧しているとのこと。また、釜トンネルの工事も完了して相互通行となり、大変便利になりました。

今年の山研も、季節は夏から秋に向かいます。これから閉所までに、どんな出会いがあるのか、そして上高地はどんな表情を見せてくれるのか、わくわくしています。

それでは皆さん、山研でお待ちしております。

◆ 編集後記 ◆

● 9月号から、「会務報告」と「ルム日誌」等の報告は、最新の情報をお伝えするようにしました。
● 夏は北アルプスを中心に3度ほど山を歩いてきました。多くの花たちに迎えられ、楽しい山行でしたが、どこでも気になったのが、ただ連れられて歩いているように見受けられるツアーのお客さんたちでした。少しずつ経験を積んでぜひ「登山客」から「登山者」になってほしいと思います。(神長幹雄)

■ 訂正 8月(723)号6ページ1段10行、武内敏夫は武内敏男、中村元久は中村之久、3段1行、山学同士会は山学同志会の誤りでした。14ページ3段8行、プレートはブレードの誤りでした。ともにお詫びして訂正します。

日本山岳会会報 山 724号

2005年(平成17年)9月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社